

雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉

鳩

小林 貴子

舞台一転夜又五倍子の若葉光
チェロの音の低きは祈り風五月
新緑や權こぐ如くチェリストは
夜又五倍子の夜又となるらん五月闇
照らされて夜の樹形や虎鷲
コテージの灯消す時鳩の声
魚眼レンズの三六〇度が梅雨で
深海に人間嫌ひ梅雨の月
異邦人裸をさらすそこは崖
三角関係ヒロインのサングラス



夜を青み

佐藤 映二

郭公やぐぐぐ迫り出す浅間山
相搏つて騰る揚羽や時止まる
夜又五倍子の夜を青みセロ激しけり
大日向への道墓原に雉子聞く
拓地の鐘風に鳴り山滴れり
青年に幡るもの卯波まぶし

四季と折り合つ

佐藤 映二

野菊とは雨にも負けず何もせず 和田 悟朗
掲句は、あの「雨ニモマケズ」の本歌取りだと思えます。
生前の和田悟朗さんと一度だけ立ち話をする機会を賜った
のは、水の構造に詳しい化学者でかつ俳人である同氏と、ア
インシュタインらの四次元時空論に触発された詩人賢治が、
どこかで重なるように思われたからでしょうか。
氏は一九六九年、佐藤鬼房を訪問（あいにく不在）の途次、
花巻に光太郎と賢治の、波民に啄木の跡を訪ねています。氏

の師橋聞石の句「銀河系のとある酒場のヒヤシンス」は、

ここは銀河の空間の太陽日本 陸中国の野原である

青い松並 萱の花 古いみちのくの断片を保て

―賢治―

を筆者に想起させます。一方、氏自身には「舌を出すアイ
ンシュタイン目に青葉」のような句があります。

冒頭の掲句に戻りますが、〈野菊〉が無垢・無心の象徴で、
〈何もせず〉が老荘の無為自然の暗喩と解しますと、「デク
ノボー」への賢治の憧れにも通じる境地ではないか、と思う
のは我田引水でしょうね。